日本ブルーノ・ワルター協会会報　第3号

1972年7月

〒166

編集発行人　菅　一

コヴェント・ガーデン王立歌劇場に於けるワルターの活動

ワルターは、ベルリン市立歌劇場音楽監督や、ライプツィッヒゲヴァントハウス管弦楽団首席指揮者の地位に就いていた頃、コヴェント・ガーデンのイギリス王立歌劇場でも、屢々客演指揮者として活躍しましたが、最近、その中のR・シュトラウスの作品の上演記録が判明しました。この資料は当協会会員、森康吉氏の提供によるものです。

「エレクトラ」

此の曲は、もともとイギリスでは、それ程愛好されてはいなかったのですが、此のシーズンには、此の曲を熟知したドイツ・オーストリア系の音楽家によって上演されました。その様な企画は此の国では最初の事でした。それによって此の曲は再評価され、ドイツ系の音楽家による再演の価値が認識されました。ゲルトルード・カッペルのエレクトラは、余りにもおとなし過ぎて、野性的性格を描き出せなかった様です。マリア・オルツェフスカは、適役だった様です。

May 26, 1925

Elektra:	Kappel
Chrysothemis:	Landwehr
Klytemnestra:	Olczewska
Orestes:	Schorr
Aegisthus	Soot
Conductor:	Walter

ワルターは、此の作品の開演の前に、R・シュトラウスの交響詩「死と変容」を演奏しましたが、名演だったそうです。尚、六月一日の再演の際には、同じ配役でしたが、指揮者はロバート・ヘーガーでした。

「バラの騎士」

	June 2, & 3, 1924	May 29, 1924	May 21, 23, & 26, 1924
Octavian:	←	←	Reinhardt
Marschallin:	Lehmann	Leider	Lehmann
Baron Ochs:	Jerger	Bender	Mayr
Valzacchi:	←	←	Gallos
Annina:	←	←	Jung
Tenor Singer:	←	←	Fischer-Niemann
von Faninal:	Renner	←	Habich
Sophie:	←	←	Schumann
Conductor:	←	←	Walter

「バラの騎士」を、コヴェント・ガーデンで初めて上演したのは、一九一三年でしたが、イギリスに於ける最高の演奏は、一九二四年五月二十一日の演奏だったと云われています。当時の「タイムズ」紙によれば、コヴェント・ガーデンに於ける全てのオペラの上演中、最高の演奏だったと云うことです。まさに、画期的名演だったと考えてよいでしょう。まず、配役を調べてみれば、その素晴しさが理解されます。マルシャリンはロッテ・レーマン、ゾフィーはエリザベート・シューマン、オクタヴィアンはデリア・ラインハルト、それにオックス男爵はリヒァルト・マイールです。この四人はウイーンの国立歌劇場から招聘されたのでした。その上、指揮がワルターと来ているのですから、さぞかし素敵だった事でしょう。特に素晴しかったのは、リヒァルト・マイールとロッテ・レーマンだったと云われています。レーマンは、一九一四年にビーチャムの指揮によるこの作品の上演で、ゾフィーを唱いましたが、マルシャリンの役を受持ったのは一九二四年五月の上演が初めてでした。それにも拘らず、第一幕終曲の名唱と、第三幕でオックス男爵を退ける場面の格調高い名演は、空前絶後の出来と賞讃されたのです。この上演が大成功だった為に、最初は四回上演の予定が、二回追加されたのです。然し、反面、その為に配役の変更が見られたのは余儀無い事でした。また、翌年五月に再びワルターの指揮棒でこのオペラが再演されたのは、この時の大成功が原因でした。

❀　❀　❀　❀　❀

翌一九二五年の上演で、主要歌手に変動が見られなかった事は、幸いでした。尤も、六月十日の上演では、ゲルトルード・カッペ

	May 17, 1929	May 14, 1929	April 22, 1929
Octavian:	←	←	Reinhardt
Marschallin:	←	←	Lehmann
Baron Ochs:	←	←	Mayr
Valzacchi:	←	←	Reiss
Annina:	←	←	Andrassy
Tenor Singer:	←	←	F. Russell
von Faninal:	Madin	←	Habich
Sophie:	←	Schumann	Alpar
Conductor:	←	←	Walter

	May 2, 10, 12, 27, 1927	June 10, 1925	May 18, 22, 28, June 12, 1925
Octavian:	Reinhardt	←	Reinhardt
Marschallin:	Lehmann	Kappel	Lehmann
Baron Ochs:	Mayr	←	Mayr
Valzacchi:	Reiss	←	Reiss
Annina:	von Hoesslin	Olczewska	Paalen
Tenor Singer:	Mummery	←	Mummery
von Faninal:	Habich	←	Habich
Sophie:	Schumann	←	Schumann
Conductor:	Walter	←	Walter

ルがロッテ・レーマンの代りを勤めましたが、これはいささか気の毒な代役で、可も無し不可も無しと評されました。けれども、アンニーナの役でオルツェフスカが代ったのは成功で、素晴しい出来を示したそうです。

リハーサルが始まる時、オーケストラのメンバーは、このオペラの有名なワルツを演奏して、指揮台に向うワルターを迎えたそうです。優雅な古き良き時代が偲ばれます。

* * * *

一年おいた一九二七年のシーズンの幕開けは、再び「バラの騎士」の上演によって行なわれました。幸いに、主要歌手に変動はありませんでした。当時、漸く一般的になって来たラジオを通じて、或る朝七時十五分から第一幕の演奏が放送された事があったそうです。この時も、矢張りマイールとレーマンが特に素晴しい出来で、不朽の名声を獲得しました。五月十八日の上演は、歌手に変動は無かったのですが、指揮者はワルターではなく、ロバート・ヘーガーでした。

* * * *

一九二九年のシーズンも、同作品の再演で開かれましたが、この度は五回の上演の中、最初の三回は、ジータ・アルパーが、E・シューマンに代ってゾフィーの役を勤めました。また、二、三回目（四月二十五日、五月一日）の上演では、ロバート・ヘーガーが指揮棒を取りました。アルパーも気の毒な代役で、彼女は彼女なりに、輝かしい声質で、第二幕の愛の音楽を効果的に唱いこなしたのですが、それでも、E・シューマンとは比べものにならないと評されました。また、ヘーガーが指揮棒を取った両夜の上

演では、ロッテ・レーマンに代って、エリザベート・オームズとフリーダ・ライダーが一度ずつマルシャリンを受持ちました。このシーズン以後、ラインハルトはコヴェント・ガーデンには出演しませんでした。アニー・アンドラッシーが、このシーズン中ずっとアンニーナの役を勤めましたが、好評を博した様です。また特筆しなければならないのは、SPに残されているイギリス録音のワルターのこの曲の第二幕終曲のレコードは（共演マイール及びアンドラッシー）、この機会に録音されたものである事です。いっその事、極く一部宛だけでも、ラインハルトやロッテ・レーマンやE・シューマンにも録音させておいて呉れれば、どんなに良い記念になっただろうかと思うと、残念でたまりません。

❀ ❀ ❀ ❀

	April 27, 1931
Octavian:	Angerer
Marschallin:	Lehmann
Baron Ochs:	Mayr
Valzacchi:	Tessmer
Annina:	Tibell
Tenor Singer:	Nash
von Faninal:	Habich
Sophie:	Schumann
Conductor:	Walter

コヴェント・ガーデンのオペラ・シーズンの開幕が、ワルターの「バラの騎士」を以て、歓呼の声の中で行なわれる事は、恒例になったと見られていましたが、残念な事に、それも一九三一年が最後となりました。而も、四回の上演の中でワルターが指揮をしたのは初日だけで、あと三回はヘーガーが指揮棒を取りました。そればかりか、オクタヴィアンはラインハルトではなく、一九二七年以来ウイーンの歌劇場のステージに立っていた、ハンガリー生れのマルギット・アンゲラーでしたが、ラインハルト程の好評が得られなかった様です。アンゲラーは、オクタヴィアンを唱うにしては繊細に過ぎ、余りにも女性的で、R・シュトラウスよりもモーツァルトに向いていたと云われています。最後の夜には、オルツェフスカが代りました。ワルターとロンドン・シンフォニーは、それ迄よりも寧ろ軽やかなタッチで処理したと評されました。マイールとレーマンは、絶対に他の追随を許さない定評を裏書しました。マイールの声には、幾分かの衰えを見せ始めてはいましたが、演技でそれを巧みにカヴァーしたそうですが、これまた残念な事に、此の時以後、マイールもコヴェント・ガーデンには登場せず、また四年後には此の世を去りました。

エンジェル・レコード、GRシリーズに遺されているヘーガー指揮、マイール、レーマン、シューマン、オルツェフスカ、ウィーン・フィルの演奏による録音は、此の頃行なわれたもので、イギリスの楽界に金字塔を建てた此の大名演の余韻を伝えるものです。

「例会の記録」

第七回例会は、三月五日（日）、東京銀座四丁目、山野楽器四階ホールで開催。参加者数十三名。

一、メンデルスゾーン　真夏の夜の夢「夜想曲」
　　ロイアル・フィル（一九二五）
同　　「スケルツオ」
　　NY・フィル（一九四五）

メンデルスゾーンの音楽は、ワルターとそれ程異質的とは思われないのですが、ワルターのレパートリーの中には、メンデルスゾーンの曲は非常に少い様です。レコードでも、ミルシュタインとの協演による「V協奏曲」と「フィンガルの洞窟」（ワルター最古の録音の一つ）と、「真夏の夜の夢」からの二曲しかありません。「フィンガルの洞窟」は、協会としても未入手ですし、「V協奏曲」は市販されたレコードが相当に出廻っていて、珍しくないので、「真夏の夜の夢」からの「夜想曲」と「スケルツオ」を採り上げてみました。

この二曲の録音の間には、丁度二十年のへだたりがあって、一九二五年録音の「夜想曲」は旧吹込で、「スケルツオ」は電気吹込です。「夜想曲」は本邦未発売です。また「スケルツオ」は、我が国ではEPで一度発売されましたが（日C　EW一五）、間も無く廃盤になり、現在では比較的入手困難なものとなっています。もともとSP録音ですし、SPレコードの方が音が鮮かなので、そちらから音を採りました。

二、R・シュトラウス　交響詩「ドン・ファン」
　　a　ロイアル・フィルハーモニー（一九二六）
　　b　ベルリン・フィルハーモニー（一九五〇）

ワルターは、人間としての、また音楽家としてのR・シュトラウスを尊敬出来なかったのですが、彼の作品は愛していました。その中、「ドン・ファン」は二種の録音がレコードとして、市販されました。初期電気吹込SP版は、ワーグナーの「リェンツィ」序曲に次ぐ、ワルターのレコードの中、第二回目本邦発売レコードとなりましたが、一九五二年のLPのNYフィル版は、円熟した名演として名高いものです。ところが、最近もう一つの「ドン・ファン」が見つかりました。それは、一九五〇年、ベルリン・フィルとの協演によるものです。フルトヴェングラー等と共にスクリーンに現われ、モーツァルトの第四十番ト短調交響曲を演奏した映画がありますが、それと同時に演奏されたものなのだそうです。（その結果、あの映画のワルターが出演する部分は、一九五〇年作製ということが判明しました。）　ワルターとベルリン・フィルとの出合いは古く、特に、一九一九年から一九三三年にアドルフ・ヒトラーが政権を握る迄、毎年「ブルーノ・ワルター・コンサート」を開催した程、その関係は親密でした。ワルターの述懐に依れば、彼とベルリン・フィルとの関係が始った頃は、ヴァイオリン奏者は、殆ど全員がヨーゼフ・ヨアヒムの弟子だったそうです。一九五〇年のベルリン・フィルには、恐らく其の様な伝統は消え去っていたでしょうし、また近代化・国際化されたベルリン・フィルを指揮するワルターの感懐は如何だったでしょうか。而も、其の間には長い長い暗黒の時代があったのですから。此の演奏の特徴を一口で言えば、「流麗」たるところで、こんな処にも、最近のベルリン・フィルの体質が現れている様に思われます。

三、ベートーヴェン　交響曲第三番「英雄」
　　シンフォニー・オヴ・ザ・エアー

既に三種のワルターの「エロイカ」のレコードが市販されました。其処へまた、もう一種現れたのですが、今度のは何とオーケストラがシンフォニー・オヴ・ザ・エアーなのです。一九五七年二月三日、一週間前に他界したトスカニーニの追悼演奏会に於ける演奏です。オーケストラが、トスカニーニの薫陶を徹底的に受けた元NBC・SOだけに、彼の影響が全然と言ってよい程抜けていない為に、ワルターとしてはユニークな演奏となっています。トスカニーニ色とワルター色の融合が、此の演奏の特徴と言ってよいでしょう。幸いな事に、これは素晴しい名演となりました。

第八回例会は、六月十七日（土）に、山野楽器のホールで開催。参加者は二十一者。

一、モーツァルト　交響曲第三十八番「プラーハ」
　　パリ・ORTF管弦楽団（一九五五・五・五）

一九五六年に、スイスで刊行された、バーナード・ガヴォティ著「ブルーノ・ワルター」という書物の冒頭に、一九五五年五月のフランス放送管弦楽団との協演による「プラーハ」の記述がありますが、この録音はその演奏ではないかと思われます。SP時代、一九三六年十二月に、ウイーン・フィルを指揮したレコードは、他の追随を許さぬものでした。また、最晩年（一九五九年十

二月）にコロムビアSOを指揮したものは、ウイーン版をさえ凌駕する名演でしたが、他のモーツァルトのシンフォニーとは異なり、その中間に録音されたレコードが無く、不思議に思って居ましたが、今度此の録音が発見されたので、この曲に対する解釈の変遷がたどれる様に成ったわけです。是亦素晴しい名演です。

二、モーツァルト　アイネ・クライネ・ナハトムジーク

a　パリ・ORTF管弦楽団（一九五六・六・一四）

b　ストックホルム・フィル（一九五〇・八・九）

第三楽章のメヌエットには、主要楽節が二つありますが、その二つ目の第一音が、演奏家によっては、レガートではなく、スタッカートで演奏される場合があります。ワルターの四種の市販レコードでは、何れもレガートで演奏していますが、クライバー指揮ベルリン・フィル（SP）では、スタッカートで演奏しているので、大分感じが変って来ます。文字で表わすのは不適当なのですが、〝タータララ〟と〝チンタララ〟の差異です。ワルターは、絶対にその一音をスタッカートでは演奏しないものだと、思い込んでいたのですが、（ORTF版でもレガートです。）ストックホルム・フィル版では、クライバー程鋭くはないのですが、この一音をスタッカートで演奏しているのです。これには驚かされました。重箱の隅をつつく様な聴き方が良いかどうかは別として、一人の演奏家が異った演奏法を採った事があるというのは、興味深い事実です。

三、ベートーヴェン　歌劇「フィデリオ」（抜萃）

フラグシュタート他（メトロポリタン歌劇場）

ベートーヴェンの唯一の歌劇「フィデリオ」の精神に最もマッチした倫理的芸術観の持主だったワルターの、此の曲の演奏録音が市販レコードの中に見出せない事は、真に残念の極みです。もう一、二年長生きして呉れていたら、この歌劇の全曲の録音計画が、アメリカCBSコロムビアで出来上った筈で、既に配役も決定し、契約も順次成立していたのだそうですから、彼の死は惜しみても余りあるものです。ただ海賊版ではあっても、一九四一年二月二十二日の上演の録音が聴かれる事が、僅かに慰めです。

この例会で御紹介したのは、また別の録音で、上演日は一九五一年三月十日です。主役は四一、五一年版共、キルステン・フラグシュタート。フルトヴェングラーの指揮の下に、一九五〇年に同じ名演唱を果した彼女は、一九五二、三年には急激に声の衰えを見せ始めたのですから、この五一年のワルター版の彼女は、全盛期最後の名演唱の一つを披露したものと言えます。此の頃のワルターは、精神的にも落着きを示し、安定した指揮ぶりを示すところが、同じメトで演奏した一九四一年版とは違います。同じたたみ込む様な迫力に満ちたパッセージでも、四一年版の様な唐突的な感じや不安定感を持たせません。却ってそれに依って、スケールの大きさが増し、多様性を持つ演奏として、彫刻の深さを感じさせるのは偉大な事です。「レオノーレ」序曲の三番に特にその特長が認められ、（残念な事には、四一年EJS版にはこの序曲が入っていません。）名演の名をほしいままにしたシンフォニックなまた優美にして典雅、品格の高さが香る一九三六年のウイーン・フィルの演奏と比較する事は、是亦興味の湧くところです。

全曲を聴いて戴く時間が無かったので、「フィデリオ」序曲、レオノーレのアリア、フロレスタンのアリア、「レオノーレ」序

曲第三番、終曲を抜萃して鑑賞して戴きましたが、「フィデリオ」序曲とレオノーレのアリアは、比較研究の為、四一年版と五一年版の両方を聴いて戴きました。

四、ブラームス　ピアノ協奏曲第二番

マイラ・ヘス（P）、NY・フィル

先の「フィデリオ」が一九五一年三月十日の上演で、このブラームスは翌三月十一日の演奏です。その上、三月十二日には、ワルターはベートーヴェンの第七交響曲及びブラームスの大学祝典序曲を（共にNY・フィル版）、録音して居ます。七十四、五才の老人としては大したエネルギーで、而も連日素晴らしい名演を示して呉れるのですから、大したものです。

さて、ヘスとワルターは、実に馬が合うコンビだったと見えます。其の事は、モーツァルトのK・四六六のコンチェルトでも窺い知る事が出来ました。他の器楽奏者との協演では、ワルターが君臨して、独奏者が萎縮する場合が、無きにしも非ずですが、このヘスとの協演の場合、ワルターはヘスに自由に弾かせながら、何時の間にか自分のペースに乗せて了うという、声楽伴奏の場合の彼の特長が見えるのは興味深い事です。ヘスは淡彩、平坦、地味な傾向が無い訳でもなく、良く言えば温雅、典麗、上品等の言葉が当てはまりますが、悪く言えば突っ込みが足りないとか、彫りの深さに欠けると言われて居ます。けれども、ワルターの伴奏に支えられた場合には、実に活気に満ちて来て、自由且つ華麗さが生れて来るばかりか、緊迫感、凝縮力迄感じさせるのですから興味が持てます。是が六十才の老女かといぶかしく思われた方もあったと思います。兎に角、K・四六六のコンチェルトと同様、密度の濃い演奏です。

「第三回研究用録音資料刊行」

当協会では、今年六月、左記LP二枚を会員諸兄に配布致しました。

A　実況録音（BWS—一〇〇五）

a　ブゾーニ　ヴァイオリン協奏曲ニ長調作品三五a

アムステルダム・コンツェルトヘボー管弦楽団

アドルフ・ブッシュ独奏（一九三六・一二・三）

b　ブルッフ　ヴァイオリン協奏曲第一番ト短調

グィラ・ブスターボ独奏、メンゲルベルク指揮

アムステルダム・コンツェルトヘボー管弦楽団

（一九四〇・一〇・二七）

ワルターとしては、比較的珍らしい現代音楽の演奏です。お互いに尊敬を払い合った旧友ブッシュとの協演は高度の緊迫感に満ちた次元の高い芸術品である事は、何人たりとも認めるにやぶさかではないでしょう。b面はワルターの演奏ではありませんが、是亦お互いに尊敬し合ったヴィッレム・メンゲルベルクの指揮です。メンゲルベルクを説得する時には、ワルターの名前を出す事が、「こつ」だったというエピソードさえ残っています。

B　スタジオ録音（BWS—一〇〇六）

a　ハイドン　交響曲第九二番ト長調「オックスフォード」

b　ウェーバー　歌劇「魔弾の射手」序曲

J・シュトラウス　喜歌劇「蝙蝠」序曲
パリ音楽院管弦楽団（一九三八）

モーツァルト　歌劇「魔笛」序曲
パリ・モーツァルト記念祭管弦楽団（一九二八）

パリに於けるワルターの録音を集めました。パリ音楽院との協演による録音には、此の他ヘンデルのコンチェルト・グロッソ、ロ短調作品六ノ十二と、ベルリオーズの「幻想」交響曲とがありますが、前者はアメリカ・ワルター協会に於ける刊行レコードに含まれ、後者は六月二十五日に日本コロムビアから発売されるので、省きました。

モーツァルトの「魔笛」序曲は、オーケストラの名前こそ異ってはいても、記録によれば、一九二八年の初めに、ワルターがシャンゼリゼー劇場に於いて、パリ音楽院管弦楽団を率いて、モーツァルトのオペラ・チクルス「魔笛」「フィガロの結婚」「ドン・ジョヴァンニ」「後宮よりの逃走」「コジ・ファン・トゥッテ」）を五夜にわたって（一説に依れば、三回宛合計十五夜）、上演しているので、パリ・モーツァルト記念祭管弦楽団とは、パリ音楽院管弦楽団の、其の時限りの別名と考えて、このレコードに加えました。

此の中では、「蝙蝠」が、空前絶後の大名演です。ワルターは「蝙蝠」が殊の外得意で、ベルリン国立管弦楽団、ウイーン・フィル、東海岸コロムビアSOとの協演による名演を遺しましたが、それと較べても、このパリ版はずば抜けて素晴しく、クライバー、クラウス、ボスコフスキー等、此の曲を得意にしていた諸指揮者達の名演をも遙かに凌駕するもので、滅多な事では使うべきでない「決定盤」の言葉を捧げてしかるべきものです。

「珠玲仁雅」

・去る六月二十五日（七月新譜）に、日本コロムビアがワルターのベルリオーズの「幻想」交響曲の複刻盤（DXM一四四）を発売しました。ただ残念な事は、第三楽章で第一一三小節から第一五九小節までがカットされていることです。此の部分は、SPでは、全体として第八面、第三楽章としては第三面に当ります。何故こんな事をして呉れたのでしょう？　SPで聴いた事の無い愛好家諸兄が「こんな物か」と誤って受取られる事を、怖れるものです。日本コロムビアは、たとえ第三楽章が途中で切れても、（SPに於ける第三楽章の第一面がa面に廻っても）、全曲を複刻し直すべきだと思います。

それから、今年秋、東芝エンジェルから、GRシリーズの一枚として、ギーゼキング、ワルター、ウイーン・フィルの協演による、ベートーヴェン・ピアノ協奏曲第五番「皇帝」（一九三四・一〇・六）が発売されます。このレコードを複刻したドイツ・エレクトローラ盤には、LSOとの協演によるベートーヴェンの「コリオラン」序曲が加えられているのですが、エンジェル盤ではコリオランが省かれています。是も寔に残念な事です。

・雑誌「LP手帖」六月号には、「プライベート・レコード情報リサーチ」欄に、匿名氏が私達の協会の紹介を行っています。

・JRCC（日本レコード蒐集家クラブ）の会報第二号が、今年

六月に刊行されました。レコード音楽全般にわたる、クラブ員の研究の精華が掲載されています。御一読を御希望の方には、当協会で実費でご斡旋申し上げます。（会員特価三〇〇円、送料一〇〇円）。同クラブ会報第一号は代価一〇〇円です。御希望の方は、定額小為替で御送金下さい。尚、右会報第二号には、「ワルターの旧吹込レコード」（副題　ワルターの「悲愴」）（菅一執筆）が掲載されています。

・私達の畏友宇野功芳氏は、現在ワルターのレコードに関する著作を御執筆中です。この著書は、今年中に音楽之友社から刊行予定です。御期待下さい。

・当協会会員[redacted]中学校の職員室前の廊下にある掲示板に、人間的偉人ブルーノ・ワルターの業績を生徒諸兄に知らせる為に、写真やLPのジャケットを掲示すると共に、ワルターの人となりとその偉業の一部を御紹介下さいました。[redacted]氏の積極的な啓蒙活動に敬意を表するものです。

・当協会の第四回研究用録音資料の一部として、左記のLPが完成しました。

BWS－一〇〇七（実況録音）
R・シュトラウス　交響詩「死と変容」
NBC交響楽団（一九五一）

同　交響詩　「ドン・ファン」
ベルリン・フィル（一九五〇）

同　交響詩「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快な悪戯」
ロスアンゼルス・フィル（一九五〇）

・当協会では、会員諸兄のワルター研究の精華としての、研究論文、エッセイ、随筆、文献等々を募集致します。奮って御応募下さい。

・以前、日本レコード蒐集家クラブでは、毎月の例会席上、篤志家による自己の研究発表を行っておりました。当協会でも、その方法を採用し、例会席上で、研究発表、ワルターとの出合いに関するお話等々、何でもワルターに関する講話を（LP、テープ等によるワルターの演奏を参会者一同と共に聴き乍ら）して下さるヴォランティーアを求めております。御希望の方は、協会事務所まで、お申込下さい。（お礼として、次期会費納入を免除して差上げたいと思って居ります。）

・最近、ワルターの女婿カール・リント氏が逝去されました。リント氏は、ワルターの長女ロッテ（一九七〇年に死亡）の夫君で、ワルターの没後、ドイツに居住していたそうです。
尚、リント氏の死により、ワルターの家族は全員他界した事になります。